６９歳の老医、平成 24 年９月より来年３月までの予定で宮城県気仙沼市立本吉病院にて働いています。ここは人口 11000 人のうち 142 人の方が死亡または行方不明となり、一部損壊を含めると 32%の家屋が被災した地域です。この病院も一階は浸水し、診療記録や医療機器等殆どを失い、一瞬にして病院機能も停止しましたが、幸い、入院していた 20 人の患者さんは無事でした。病院スタッフは水や電気、食料、勿論医薬品も無い中、病院に泊まり込み、流れ込んだヘドロと瓦礫処理に当る一方、傷害を受けた方や薬を無くした患者さんの対応に追われたと云います。被災から一週間後に全ての患者さんを転院させた後、間もなく病院は保険医療機関を返上し、責任者のいないまま　ボランティア医師だけの無料救護所となりました。被災 3 日後には食糧や医薬品を持参した病院グループもあり、その後も全国から多くの個人や団体の医療ボランティア支援を受けています。今なおプライマリーケア連合学会の先生方には日祭日の当直を担当して頂いています。更に公的、私的、個人、各種団体の方々から、医療機器や医薬品、消耗品　自動車に至るまで物心にわたって支援を受けています。被災直後より週 1 回　山形県酒田市から片道 4 時間かけて支援に来ていた川島実氏が 10 月 1 日に正式に院長とし就任されて、再び病院として再開いたしました。そして 24 年 4 月より、齊藤稔哲副院長が赴任された事で病院としての機能が大きく向上しました。閉鎖の危機も危ぶまれた中、再開を信じて頑張っていた病院スタッフの力が大きかった事は勿論です。しかし、一階部分の改修工事が終え、外来診療に使えるようになったのは 24 年の 8 月からで、まだ病棟再開も出来ていません。38 才の院長はプロボクサー経験の救急医、総合診療医で、45 才の副院長もまた専業農家を目指した小児科、総合診療医です。ユニークな経歴を持つ二人ですが、医師として優秀だけでなく、志が高く、人間味溢れる人物なので、周りには意欲を持った若い研修医や学生が訪れます。その中に附設 50 回生の高石浩司君がいました。この町も高齢化が急速に進み、5 年後には 65 才人口がおそらく 35%を超える地域で、数か所の高齢者施設はありますが、医療施設は病床の無いこの病院だけなのです。専門を要する医療の場合には、患者さんは気仙沼、石巻や仙台まで時間をかけて行かねばならず、終末の高齢者の増悪であっても気仙沼市立病院にお願いする他はありません。その為、本吉病院は入院再開の準備をするとともに　訪問診療に力を入れています。ここでは多くの患者さんは高齢者で複数の疾患を抱えています。都会では専門領域だけの診療で済みますが、ここでは内科全般、小児科、皮膚科、整形、小外科など診ない訳にはいかないのです。今　院長が目指しているのはこの病院を家庭医もしくは総合診療医のモデル病院とし、更には家庭医を目指す医師の研修病院とする事で、私もそうなる事を信じています。医療と云えば先端医療の事ばかり話題に上りますが、過疎化が進んでいる地域では家庭医こそが必要なのです。この活気溢れる病院に一旦は医師を辞めた私が迷い込んでしまいましたが、意欲に燃えた若い医師が充分に力を出せるように、裏方で 1 人の医師として働いています。同行している妻は病院近くの小さなアパートで単身赴任の医師 3,4 人に朝食を提供していますが、そこでの会話が退屈しがちな毎日を楽しくしてくれます。ここではじめて、世の中には善意のボランティアが多い事、受け入れ

側は自主性があり、やさしい心遣いを持つ事で両者に良い関係が得られる事を知りました。先日、被災で一度は帰国したアメリカ人の英語教師が風邪で受診しました。本吉町の印象を聞くと「私はここが好きです」の答えでした。健康寿命が余り残されていない私が皆さんの好意で、こうして過ごせるのは幸せと思っています。